

INTERVIEW

Profile
なかいひろまさ
中井裕真さん

1992年に国連ボランティアとしてボスニアの人道援助活動に、1994年に南アフリカの国連選挙・平和運動監視活動に参加。1995年、ユニセフ・ミャンマー事務所に赴任。ユニセフ・イラク事務所などでの勤務の後、2000年9月からユニセフ・ソマリア・ボサソ事務所長。

なぜ戦争が続いているの？

Q ソマリアの戦争など、歴史的なことについて教えてください

A ソマリアで起こっている内戦は、民族の紛争ではありません。ソマリアは单一民族の国です。

ソマリアは1887年にイギリス領とイタリア領に分かれてしまいまし

た。1960年6月にイギリス領だったソマリランドが独立し、その2日後にイタリア領だったところが独立しました。その後、2つの国がひとつの国として独立し、政府ができました。しかし、ソマリア全体をまとめるのは苦労しました。なぜなら、ソマリアには遊牧民族が多く、その上、先祖代々続く氏族という家族の大さなかたまりがいくつもあって、氏族同士の争いが昔からあったからです。

そこに、アメリカと旧ソビエト連邦の間の東西冷戦が大きな影響を与えました。ソマリアが独立した後、政権についた大統領はソビエトの支援を受けて、共産主義の國づくりをめざしました。その後、ソマリアのとなりの国エチオピアで、軍が政権をうなぎ上りで奪取され、ソマリアも政権がきました。それを見たソビエトはエチオピアへの支援に力を入れるようになります。そうすると、今度は共産主義をきらうアメリカが政治や軍事の面からソマリアに力を入れるようになりました。こうして、ソマリア国内には、アメリカとソビエトからきた武器や弾薬がたまっていたのです。

ソマリアの政府は、政府に反対する勢力をあさえきれず、国全体を治めきれなくなってしまいました。政府がなくなってしまった後は、さまざまな勢力が武器を略奪して争いをはじめ、それ以来、いまだに争いが続いています。

Q 百年も前の植民地主義やその後のアメリカやソビエトが今のソマリアをつくっているということですか？

A アフリカの地図を見ると、環境も不自然にまっすぐですよ。植民地の歴史のためです。今も、アフリカの多くの国は、旧宗主国（昔支配していた国）の欧米の国ぐにと経済などで深いつながりがあり、そのつながりなしでは生きられない構造になっていますね。

人びとの暮らしとユニセフの支援

Q ソマリアではどのような農業がおこなわれているのですか？

A ソマリアの気候は北部と南部で大きく違います。北部には遊牧民族が多く住んでいます。南部には大きな川があり、2本流れています。その川にはさまれた肥沃な土地では、バナナやソルダム（穀物の一種）などが育てられています。昔はお米もとれました。メイズ（とうもろこし）が食糧支援で届けられたりしますが、ソマリアの人にはあまり好きではないらしいです。遊牧民でも半牧半農という人もいますし、場所によっていろいろな暮らし方をしています。

ソマリアって国、知ってる？

「ソマリア」と聞いて、どこが国かすぐにわかりますか？アフリカの東、アフリカ大陸の角のようになっているところにあるソマリアは、長い内戦と干ばつや洪水などの自然災害のために、人びとの生活はずたずたになりました。でも、ソマリアのことを知っている人は少なく、国際社会もあまり関心を持っているとはいえないかもしれません。そのソマリアの話をしてくれたのは、ソマリア・ボサソの町にあるユニセフ事務所長の中井裕真さん。中井さんによると、ソマリアの状況は「国全体が難民キャンプ」のような感じなのだそうです。



つくり、先生をよんできて、学校を開いています。そんな親に「学校をつくったので、教材や備品を支援してくれないか？」という話がきて支援がはじまることがあります。そういう場合、ユニセフの支援と現地の要望は合っていますよね。

Q 戦争の中で生きている子どもたち、心の負担が大きいと思うのですが、どのようにサポートしているのですか？

A ユニセフは心に傷を負った子どもたちへのサポートをしていて、それなりの経験もつんでいます。しかし、残念ながらソマリアではまだそのような支援活動はできていません。

たとえば、コソボの難民キャンプの場合、対象となる子どもがたたまっていて、集中的に支援ができますが、ソマリアは日本の約1.8倍の面積に日本の人口の20分の1（600～700万人）の人が住み、子どもたちも散らばっています。内戦が続き、子どもたちがどんどん亡くなっているような地域では、薬や食糧などの支援が先、教育は後、と思われるがちです。でも、今、私たちはこういうところだからこそ教育が必要だと主張して、小学校教育に力を入れています。教育は発展性があります。学校で学ぶことが生きのびるために必要な知識を得ることにつながったり、小学校が「普通の」生活を子どもたちに提供する場になったりします。

それから、まだ小さい規模ですが、元子どもの兵士の社会復帰のための支援を始めています。首都モガディシで、120人に受け入れ予定のところに600～700人の応募がありました。そこでは職業訓練などがおこなわれています。

Q 女の子は差別されている？

Q 男の子より女の子の就学率が低いのは、「女の子に教育はまだ」という考え方の人が多いということですか？

A そういう部分もなくはないと思います。ただ、男の子も女の子も小学校に通っている子どもは圧倒的に少ないのです。男の子であれ女の子であれ、小学校に行っても意味がない、家庭のらくだを追わせたり、漁の手伝いをさせたり、家の手伝いや弟や妹の世話をさせたりする方がいいと考えられているようです。

高学年になると、女の子の退学率が高くなります。それには、学校が女の子の通える環境になっていないという理由もあります。ソマリアでは、女の子のトイレは入っていく姿が見えないように壁をつくっておかないといけません。教室も男の子と女の子が別のことが多いです。そのようなトイレや教室がある小学校が少ないのです。

Q 女性は、やっぱり差別されているのですか？

A それは見方によると思います。水くみや家事、子どもの世話など重労働を担っているのは確かに女性です。でも、日本や欧米の女性に対する考え方をそのまま持ちこんでも、すぐに根づくと





©UNICEF/HQ00-04781/Chalasani

は思えません。たとえば 安全な水が手に入る水場をつくるとしましょう。その管理委員会を住民でつくってもらい、そこに女性を必ず入れてもらおうとしてもあまり意味はありません。なぜなら、そうした場で女性が発言する習慣はないのです。

聞いた話ですが、大切なことを決める長老会議に出てくる男性は、家庭で妻に「こんなことを話してきなさい」と言われてきているそうです。ユニセフは、大切なことを決めるときには女性の意見が反映されるように、と考えていますが、(委員会や会議に女性が出ていなくても)そういう仕組みがあるにはあるのだよと教えていました。

それから、教科書に女の子が会議の議長をやっている絵を入れるなどの試みもはじまっています。そんな教科書を見て、だんだんみんなの意識が変わっていく効果を期待しています。

中井さんから見た日本、国際協力



Q 中井さんから見た日本とソマリアについて教えてください

A 日本はいい国ですよ。でも、実は、こういう仕事を始めた理由のひとつは日本を出たかったからなんです。外国に出てからも最初は日本人スタッフとして見られるのがいやでした。でも、今は日本人と見られることに誇りを感じています。というのも、世界のどこに行っても、日本に対して敬意を持たれていることを感じるからなんです。有名なのは電気製品や車ですが、よく聞くと、そういうものを生み出した日本人や日本の社会に対する尊敬があることがわかるんです。

ソマリアについては...、ソマリアに限りませんが「世界は不公平だな」とは思いますね。夜の地球を撮影した衛星写真を見たことがありますか? 日本やアメリカは電気でピカピカ光っているのに、ソマリアも、私が働いたことのあるミャンマーもイラクも真っ暗ですもんね。

Q 最近、国際協力が何かされいごどのように言われているのですが、中井さんは国際協力をどう考えますか?

A 私も、かっこいいかな、とあこがれて入った世界ですが、実際はきれい



ごとではすまないこともたくさんあります。大学で先生が福祉について言ったことですが、福祉には「熱き心と冷たき頭」が必要だ。理想は大事だが、理想を具体的なサービスに置きかえていくときに、現実を見すえてサービスをつくりあげられるプロフェッショナルになってほしい。と。これは国際協力の仕事にも当てはまると思います。

Q 現場において、実際に人が死んでいたりするのを見て、中井さんは人を助けることや命をどのように思いますか?

A 人が目前で亡くなるのはつらいです。でも、とらわれすぎでは先へ進めなくなります。ソマリアでは毎年コレラが流行し、今年の4月にも300人くらいが私の担当地域で亡くなりました。病院に行くといどい状況で、言葉もなかったのですが、そこで止まってしまうわけにはいきません。こういう時こそ「熱き心と冷たき頭」です。現状を受け止めて、「じゃあどうする」と解決の道を探します。それで給料をもらっているわけですし。この給料はみんながユニセフに募金してくださった中から出していることを忘れてはいけないことです。

それから、あまり「助ける」とは考えません。募金をしてくださるみんなと現地の「橋渡し」をしている感じがします。ユニセフは「方法を提供」します。魚を釣ってあげるんじゃなくて、釣り方を教える、といったふうに。現地の人は自分達で暮らしに合うように工夫します。ときには、私たちが思いもつかないようなもっとよい方法を生み出していることもあります。私たちはそれを教わって、別の村でそれを広めたりもします。結果的に「助けている」部分もあるかもしれません、そう意識したことはないです。



インタビューを終えて...

ネットワーカー記者 の感想

私は将来、開発途上国での支援活動に参加したいと思っています。それが、今回の記者を希望した一番の動機でした。今回のインタビューを通して自分の意識が大きく変わりました。中井さんのお話を聞いていて、一番ショックだったのは自分の今までで考えていたことと現実の違いでした。私は今まで、支援活動に対して理想やあこがればかりで、カッコイイ部分しか知らなかったのだということに気づかされました。中井さんのお話の中で、「熱き心と冷たい頭」という話がありました。それを自分のことで考えてみると、私には「冷たい頭」がないと思いました。いつも感情で動いてしまい冷静な判断ができなくなっていました。

まいます。中井さんのように、時には冷たい頭で通じていけるような強い人間になりたいと思いました。これから、自分の目標を実現させていく上で大きな課題が見つかった気がします。時間をかけて少しづつ自分を変えていくと同時に、夢を追いかける熱いだけはずっと持ちづけたいと思いました。

西子 紗世 17歳

すごくいい体験をしたな、と思っています。ずっと夢のような、遠い存在にあった「ユニセフ」がなんだか身边に感じられるようになりました。また、今回インタビューをさせていただいた中井さんもすごく気さくな方で、インタビューがとても楽しかったです。

中井さんの本音トークもいくつか飛び出したり、本当にあつというまの2時間でした。

それから、一緒にインタビューをしたみなさんも、とても楽しめたばかりでずっと笑っていた気がします。

「国際協力」ってほんと一体何

だろ。家に帰ってからも私はそのことで頭がいっぱいでした。今、自分ができること。自分にしかできないこと。って、何があるんだろう。日本だけじゃなく、世界のことについても考えるようになりました。

最後に中井さんをはじめ、関係者の皆さん、すばらしい体験をありがとうございました。

山瀬 麻里絵 15歳

左から 西子さん、田中さん、中井さん
漆原さん、山瀬さん、中佐さん

メッセージ

Q 日本の子どもたちに何を望みますか?

A 日本はもうダメなんじゃないか、なんて言われていますが、半年くらい日本を留守にして帰ってくると、どんどん新しいものが出て変わっています。世界的に見たら、日本みたいな国は限られています。日本の支援やパートナーシップを求めている国にこたえられるだけの体力は持っていないといけないと思います。それだけの期待があるということは自覚してほしいと思います。

Q 開発途上国での支援活動をめざしている人にアドバイスを

A よく考えたほうがいいと思いますよ。日本で生活していれば当たり前のことが開発途上国では当たり前ではありません。このような仕事にすべての人が向いているわけではありません。また、国連に入りたい人はたくさんいるわけですが、「国連に入ること」を目的にしないでほしいと思います。国連は大きな器であってその中にいろいろな活動分野があります。まず自分がどんな分野で何がしたいのかをはっきりさせた後で、それを実現する手段として国連機関やNGOをめざしてください。



Q 高校で栄養の勉強をしているので、将来は理系の大

A 学に行きたのですが、それでもユニセフで働けますか?

A もちろん。栄養不良が深刻な国はたくさんあり、栄養はユニセフの活動でも重要な分野です。理系の専門性が求められる活動分野はたくさんありますよ。



©UNICEF/HQ00-00500/Chalasani

国でユニセフが活動するということは日本の人たちとの橋渡しをしているということだとおっしゃっていました。私も早く自分の夢である日本の人たちの橋渡しができる世界の貧しい国の子ども達の力になれるような仕事につきたいと思います。今回、中井さんはもちろん、同じユニセフ子どもネットワーカーのみんなとも自分たちが、今、思っていることをたくさん話し合えたので私もにとってプラスになりました。これから、私たち地球の子どもみんなで「これから私たちの課題」をみつけていなければいけないです。

中佐 友衣 15歳

今に感謝します。インタビューしてて印象に残ったのは、ソマリアなどの現地で働くには、「熱き心と冷たき頭が必要だ」という言葉です。実際、中井さんは現地のようすや仕事の内容などをドライに話してて少し驚きましたが、それが現実なんだとか改めて認識させられました。

また、ソマリアの問題を考えると、例えば女性器切除の問題にしても、ソマリアの紛争にしても、ひとつの方針から判断するのは危険だと思いました。良い悪いの問題でないことが多いと思うし、それぞの立場があり、そこに歴史やいろいろな欲望が絡まりあっていることが多くあります。だからこういった問題は解決することが難しいのだと思います。だからよりいっそ教育が必要だと思いました。

漆原 直美 17歳

